

[論 文]

今西祐行の農業小学校実践に関する研究 — 国語科教育から環境文学、そして総合学習へ —

A Study of Practice by Sukeyuki Imanishi in an Agricultural Elementary School
— A Point of View from Japanese Language Teaching, Environmental Literature,
and Integrated Study —

中 島 賢 介*

要旨

今西祐行は、小学校国語教科書において現在でも採録されている「一つの花」をはじめ、多くの戦争児童文学や歴史児童文学作品を遺した児童文学作家として著名である。今西は後半生を通して菅井農業小学校の実践を行った。今回は、その実践が行われた目的や経緯、実践の背後にある思想を、農業小学校に関する一連の記録、テキスト、校歌から読み取る。環境文学の視点から考察すると、古来から伝わる土の思想、農業と文化の関係、共生の概念など総合学習に取り上げられている環境教育へと発展していく内容であることが明らかになった。

キーワード： 国語科教育(Japanese Language)／総合的学習(Integrated Study)／
農業小学校(Agricultural Elementary School)／環境文学(Environmental Literature)

はじめに

今西祐行（1923-2004）は、長年小学校国語教科書に採択されてきた「太郎こおろぎ」、「一つの花」、「ヒロシマのうた」など多くの作品を生み出した児童文学作家として知られている。それだけに、作品に関する教材論や教育実践など先行研究には枚挙に暇がない。今西自身も、教科書の編集や国語教育に関する講演会などにも参加するなど、直接教員としての授業経験こそないが、国語教育界に大きな足跡を遺している。

今西は、1987（昭和62）年、神奈川県津久井郡藤野町牧野菅井（現、相模原市緑区牧野）において私財を投じて菅井農業小学校を設立・開校する¹。この菅井農業小学校については、すでに関口（2004）が自らの研究を集成した『一つの花 評伝今西祐行』において解説している。この解説には、今西が藤野町への移住、農業小学校の構想と

開校に至るまでの経緯、農業小学校の理念と全国的な広がりについて記されている。

今回は、今西自身が執筆、構想した農業小学校に関する作品『土ってあったかいね — 農業小学校の記 —』、『農業小学校の博物誌』、『農業小学校のうた』²をテキストにする。そして、これらのテキストを環境文学の視点から分析する。さらに、農業小学校における今西実践が文学作品を体験的に理解することの重要性と、総合的学習の時間の目標である「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通す」ことに直結することを示唆している点に着目して、農業小学校教育の理念とその広がり、将来的な展望について考察する。

I. 今西の成育歴と作品の特徴

関口（1996）は、今西作品の原点を3つ挙げている。

- 一、幼少期を過ごした生駒山麓の村
- 二、軍隊生活をはじめとする過酷な戦争体験
- 三、両親から受け継いだキリスト教³

第一に、幼少期の記憶についてであるが、『今

* NAKAJIMA, Kensuke
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
国語、児童文学

『西祐行全集』では、今西自らがまとめた年譜で辿ることができる。それによれば、今西は1923（大正12）年、大阪府中河内郡枚岡（現大阪府東大阪市）に、父善太郎、母こよ子の七番目の子として出生している。今西家代々庄屋の家系であったが善太郎は村長、村役場を退職後今西積萃社という印刷所を経営する。その後、経営に行き詰まり1926（大正15・昭和元）年会社は倒産し、一家は奈良県生駒郡の生駒山麓に転居を余儀なくされる。こうした背景もあってか、今西は就学前から、野山を探索し、絵本雑誌に親しんでいた。さらに、1929（昭和4）年6歳父から小さな畑を与えられ、そこにコスモスを植えるという農業体験を行う。この年には次のような記載がある。

春、父が近くの山のガレ場に、小さく六つに区切った畑を作ってくれる。きょうだい一人ずつの畑で、自分の好きな種をまけという。母に教えられてコスモスをまく。畑作りに夢中になる。後年農業小学校を開校した原因の一つは、そのときの楽しさが忘れられなかったからである。（p.396）⁴

後年、自分の原風景はこの山にあると述べている箇所も見受けられることから、こうした幼少期の農業体験によって自然観が醸成されてきたことが分かる。なお、この大阪府と奈良県を跨ぐ峠は暗がり峠と呼ばれ、『くらがり峠』として作品化されている。

大阪から奈良へいく道に、奈良街道とよばれる古い道があります。

いまはもう、ほうぼうで自動車道路にたちきられて、ところどころに、わずかに昔のおもかげがのこっているだけですが、この道ができたのは、もう千年以上も昔、奈良に都があったころのことだといわれています。

くらがり峠というのは、この道が、奈良と大阪のあいだにある、生駒山という山をこえるところにある峠です。（p.58）⁵

この『くらがり峠』に登場する地名や名刹（髪切山、慈光寺、松原、枚岡）はすべて実在し現存しているが、民話というスタイルをとって開発される以前の風景を描写している。また、幼少期の農業体験は、現在の国語教科書にも掲載されている『一つの花』の着想につながっている。

戦後、はじめて自分が父親になったとき、私は

「一つの花」という作品を書いた。中味は全く別の話になっているが、幼い日、山の家に小さな畑を作ってくれた父の想いを想像して書いた。この作品は今も小学校の国語の教科書にのっていて、多くの子どもたちが読んでくれている。

六十五年もたった今でも、あの小さな六つの畑は私の心の中にある。私は父が五十歳のときの子どもだから、あそこ父は五十五、六だったはずだ。父はとうとう再起できず、私たちに家も土地もお金も何も残してくれなかったが、何かいちばん大切なものの種だけは、あの小さな畑にまいてくれたような気がしている。（p.178）⁶

第二に、軍隊生活をはじめとする過酷な戦争体験についてであるが、今西は1943（昭和18）年11月に地元奈良に戻って徴兵検査を受け、甲種に合格して海軍に入隊することになる。翌年土浦航空隊、鹿児島航空隊、館山砲術学校で訓練を積み、南方戦線に行く予定であったが荷物が何者かに奪われるという事態に見舞われ、戦地に赴くことが許されなかった。結局海軍から軍需部の事務付きを命じられる。その後戦況はますます悪化し、本土決戦に向けて陸戦隊に配属され演習している最中、広島市に原子爆弾が投下され、原子雲いわゆるきのこ雲が上るのを見る。今西が所属していた部隊は急遽救援隊となり、焦土と化した被爆地において被災者の救護にあたる。悲惨極まる状況を目の当たりにしながらもソ連参戦の報を受けるや再び戦闘態勢に入り、終戦を迎える。同じ航空隊で学んだ仲間たちの相次ぐ戦死、被爆による夥しい犠牲者の数々、こうした戦争体験が後になって、『一つの花』、『あるハンノキの話』、『ヒロシマの歌』などの戦争児童文学作品やエッセイなどに綴られた。『ヒロシマの歌』の冒頭を引用する。

わたしはその時、水兵だったのです。

広島から三十キロばかりはなれた呉の山の中で、陸戦隊の訓練を受けていたのです。そしてアメリカの飛行機が原爆を落とした日の夜、七日の午前三時ごろ、広島町へ行ったのです。

町の空は、まだ燃え続けるけむりで、ぼうっと赤くけむっていました。ちろちろと火の燃えている道を通り、広島駅の裏にある東練兵場へ行きました。

ああ、その時のおそろしかったこと。広い練兵場の全体が、黒々と、死人と、動けない人のうめき声

で、うずくまっていたのです。(p.6)⁷

第三に、キリスト教については、両親が熱心なキリスト教徒であったため、幼少の頃から日曜学校に通うなど、一家で信仰生活を営んできたことが挙げられる。今西も第二早稲田高等学院に進学した後、大久保同胞教会にて洗礼を受けている。関口は、今西が戦後早稲田大学に復学したころ日本基督教団井草教会に転会してしばらく信仰生活を送っていたことを明らかにしている。東京神学大学で牧師を志していた長兄が病死したことなどがあり、教会そのものには距離を置くようになるものの、彼の思想には一貫してキリスト教が根底に流れていると指摘している。代表作の『浦上の旅人たち』、『留辺蘂の春』などの長編は信仰の先達の生き様を描いた作品群であるといえる。

私は神を信じているんだと思いたい時がありますが、とても自分で信者だと言う勇気がないんです。しかし、肉体や血はクリスチャンなんですね。そしてそのことで悩むことが多いです。ですから私のように、坪田譲治はキリシタンとか信仰問題を直接に残しませんでした。そこに坪田譲治という作家の潔癖さを感じます。私は書いて自分で探る以外にないんです。(p.201)⁸

Ⅱ. 白樺派の作家たちから受けた影響

先行研究や今西自身が記した年譜から、彼の作品が白樺派から影響を受けているということを窺わせる内容が散見できる。まず、関口が今西自身から聞いた話として、今西が若き日には志賀直哉の文章を範とし、志賀の短篇小说を視写することで文章の修業をしているという事実である。年譜において、1953（昭和28）年6月、三鷹市牟礼に転居した際に、画家の真垣武勝宅の離れに移ったということが書かれている。

六月、三鷹市牟礼に転居。国画会の真垣武勝画伯の離れに住む。塚原健二郎さんの紹介であった。真垣さんも塚原さんも武者小路実篤の「新しき村」に参画されていた人である。(p.401)⁹

年譜には、1969（昭和44）年3月に神奈川県津久井郡藤野町に転居するまで転居の記載がないことから、約16年間は三鷹市牟礼に居住していたと思われる。志賀と武者小路といえば、明治末期から大正期にかけて主要な文芸思潮の一つである白

樺派の中心人物である。今西の卒業論文にメーテルリンクを取り上げていることなどを総合すると、今西は白樺派から少なからずその影響を受けていたことが分かる。白樺派の作家たちには、武者小路らによる「新しき村」の他にも、有島武郎による「狩太村の農地解放」の実践がある。これらの実践は、本論を展開する上で重要な先行事例である。

「新しき村」は、1918（大正7）年武者小路實篤の提唱によって、宮崎県児頭郡木城村に建てられた共生農園である。児童文学作家塚原健二郎は、この開村に深く携わったとされている。武者小路自身も短期間ではあるが、自ら農業体験を行っていることが文献から明らかになっている。大津山（2008）によれば、塚原は当時24歳で、松代農業学校を中退後工員や店員の生活を転々としていたが、中村亮平の紹介で翌1919（大正8）年に入村している。

新しき村の歴史は、その当初から無名の青年たちの社会的理想主義を主軸として展開してきた。知名度からいって木村荘八はやや例外的存在であり、松本長十郎、竹村啓介、日守新一、川島伝吉、中村亮平、妻の操、笠井三郎、塚原健二郎、神通川喜市、平林英子などが、新しき村に参集した青年たちの一般的な特徴を代表していた。一部の例外をのぞけば、多くは自作農の階層、あるいは自営業的階層の子弟であった。社会的には中産、もしくは中産と無産のさかい目、というところであろうか。(p.41-42)¹⁰

さらに、今西の年譜には、武者小路實篤の「かちかち山」の編集にも携わっていたとの記載が認められることから、今西は武者小路の「新しき村」の実践について理解し、関心を持っていたことが分かる。

「狩太農地の解放」については、有島が「それは自己の良心の満足を得る／已む可らざる行為」として、父親からの遺産として受け継いだ北海道の狩太村（現二セコ町）にあった有島農場を小作人に解放したという実践がある。

けれども私は如何に考へても小作人と地主との経済的地位を調和し得ることは考へ得られない。夫れで私自身が何等労働するの結果でもなく小作人から労働の結果を搾取する事は私の良心をどうしても満足せしめる事が出来なかつた。で其の結果は私の文

藝上の作品を大變汚す事になり自己矛盾に陥つて苦んで来たのである。そこで私は私の土地を小作人達に與へたもので私としては、土地解放に依つて永らく悩まされて居た實際生活と思想と不調和より来る大煩悶から逃れたもので、晴々しい心地に今日なり得たのは全く土地解放の結果です。(p.406) ¹¹

土地解放そのものは、地主が小作人に土地を与えたという慈善行為のように捉えられがちであるが、有島の実践は、単なる農地解放ではない、共生農園としての解放であったということである。有島は、農地を分割してそれぞれが個人経営する方法ではなく、小作人全員が共同体の組織人として農地全体を管理するという方法を北海道大学農業経済教室の森本厚吉博士に依頼している。

かう申し出たとて、誤解をしてもらひたくないのは、この土地を諸君の頭數に分割して、諸君の私有にするといふ意味ではないのです。諸君が合同してこの土地全體を共有するやうに願ひするのです。(p.87) ¹²

この実践については、尾西（2009）によると、有島がハーバード大学院に留学していた頃、約一か月半の間ニューハンプシャー州グリーンランドにおいて、他の労働者とともに行った農業体験につながったとする考察がなされている。「有産階級出身の有島にとって他の労働者にまじって働く体験は生涯を通じて、フレンド精神病院とグリーンランドの農場の他にはな」¹³かったことが主張の根拠になっている。これらのことから、有島にしても自らの実践を通して自らの土地を解放すること、それも共同経営を行うことを指示することが分かる。白樺派の二人に限らず、自ら農業の重要性を説き実践してきた作家には、他にも宮沢賢治の「羅須地人協会」などが挙げられる。これらは白樺派にせよ、宮沢賢治にせよ、有産階級で高等教育を受けた、いわば主義主張を貫くだけの経済力と学問的素養があったからこそ成し得た実践である。宮沢は生前には全国的に知られた存在ではなかったものの、白樺派の二人についてはすでに作品を世に出し一定評価を得ていたことを考えると、当時の実践としてはその後続く世代に少なからず影響を与えたのではないかと考えられる。

Ⅲ. 今西の菅井農業小学校

先述した大正期に活躍した作家たちは、自分たちの主義主張を作品のみの世界に留めようとせず、作品世界に現実性を持たせようと各自の方法でそれぞれ農業体験を実践してきた。この事実と、これから述べる今西の農業小学校の実践とは無関係ではない。むしろ、その流れを汲む実践であるといえることができる。少なくとも、先述した資料などから今西は白樺派からの影響を少なからず受けていることが分かる。

では、なぜ作家が自ら農業体験を行う必要があるのか。文筆活動で生計が立てられているのであれば、農業を行う「必然性」はないのではないのか。農業を専門に従事する人間の立場からすれば作家の農業など、彼らが本格的に農業を生業とするような実践ではないため、所詮道楽に過ぎないのではないかという考えが出てきても不思議ではない。下手な考え休みに似たり、生兵法は大怪我の元などの俚諺が想起される。とはいえ、専門家や農家であればすべての人間が、農業に対して高遠な理想を掲げ、その理想を目指して計画的な実践がなされているかどうかという点についても考察しなければならない。

この点について、今西は当時の農家の現実を「私は山里の小さな集落に住んでいるのだが、最近耐えられないほど悲しい場面を見てしまった」と綴っている。この場面とは、今西が神奈川県藤野町に移住した際に目撃した光景のことである。

国だろうか、県だろうか、最近養蚕が再び見直されたのか、古株を抜いて新しい新種の苗を植えるよう奨励され、奨励金も交付されることになった。桑畑を持つ農家では、ブルドーザーまで出動させて古木を抜き、若木苗が植えられた。完了していく日がたつと、数人の知らない人がやってきて、しきりに写真を撮り、本数を数えたりしていた。役所の検査であつたらしい。(p.33) ¹⁴

検査後、奨励金目当てだったその農家は一家総出で若木苗を廃棄する。廃棄作業には、子どもも駆り出され、農家の子どもはその奨励金で自転車を買ってもらったとのことである。桑畑は荒廃し、小学生が校内でタバコを吸うという事件が起こり、ますます農業から遠ざかる悪循環を繰り返していた。また、エッセイ「箸一本でも下にや

れ」には、山間部の農家では自分の娘を、自分たちが暮らす交通の不便な川上よりも、豊かな暮らしができる川下へと嫁がせたいとする山村の考え方を例に挙げ、自分たちの子孫には農業を継がせることよりも都市部で働かせたいとする農家の実情が描写されている。今西は、その責任は農家だけではないとしながらも、彼らが自分たちの生業を否定し、卑下する傾向を憂いている。それと同時に、教育の荒廃に対して自分のなすべきことを行動に移す。今西は、この行動が菅井農業小学校における実践だと述べている。さらに、関口によれば、今西が藤野町菅井に居を構えたのは、「農業小学校開校の伏線であった」と指摘している。

この農業小学校開校の経緯は、『土ってあったかいね ―農業小学校の記―』写真付エッセイ集の中に詳細に綴られている。年譜に従い、その経緯を時系列で整理すると次のようになる。

1969（昭和44）年 三月 神奈川県津久井郡藤野町に転居。

1970（昭和45）年 四月 藤野町内の菅井の桑畑の中に家を新築する。

1973（昭和48）年 七月 「山の文庫だより」（エッセイ）を「毎日新聞」に発表。

1976（昭和51）年 三月 藤野町立藤野中学校校歌を作詞。

1984（昭和59）年 三月 「私立農業小学校」（エッセイ）を「小学時報」（全国連合小学校長会編）三九一号に発表。この一文が後年「菅井農業小学校」の開校のきっかけとなる。

1985（昭和60）年 四月 雄長忠が菅井小学校校長として赴任する。赴任直後、雄長が今西のエッセイを読み、農業小学校の実践を持ちかける。十一月 雄長は役場、教育委員会、農協、校区の四自治会に諮り、賛同と協力を得る。

1987（昭和62）年 三月 菅井農業小学校を開校する。（菅井小学校の児童を含む入学者25名）¹⁵

関口の指摘する「伏線」を具体的に示すと、幼い頃から「百姓」が好きで農作業ができる移住場所として故郷の生駒山麓を思わせる藤野町に転居する、桑畑の出来事に遭遇する、「山の文庫」という私設図書館を作って子どもたちの読書に貢献する、中学校の校歌を作詞する、「小学時報」からの随筆依頼に「私立農業小学校」を執筆する、

というところまでが「伏線」に相当するといえよう。

ただ、今西の実践には、構想段階において農業小学校に至るまでの思想形成があったことを指摘する必要がある。その思想に大きな影響を与えたのは、白樺派の作家たちに加え、『斑鳩の匠・宮大工三代』という西岡常一と青山茂の二氏による対談集である。今西が特に興味を示したのは、西岡が祖父から農学校で学ぶことを命じられ、農作業を行う中で作物の根元はすべて土であるといった思想を体験的に理解したという話である。宮大工の棟梁になるためには、土とその上に育った木の性質をよく理解しなければならないと説く西岡に今西は深い感銘を受けている。「宮大工と土の文化」では、土を軽視し生産性を重視した農業では本来の味がなくなってしまうと主張している。そして、徳富蘆花の言葉を連想している。その言葉とは、徳富の「みみずのたはごと」の中にある次のような文である。

土の上に生れ、土の生むものを食ふて生き、而して死んで土になる。我らは畢竟土の化物である。土の化物に一番適當した仕事は、土に働くことでなければならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを択み得た者は農である。（p.267）¹⁶

今西は、こうした徳富のいわば「土の思想」ともいうべき思想に基づいて農業小学校を実践している。さらに、農業小学校の校長を任され、実践を続けていくにはもう一つの著作によるところが非常に大きい。それは、随筆集「農業小学校の記」にも引用されている江戸前期の農学者宮崎安貞の『農業全書』である。この本は、父のかたみとして持っていたものであり、農業小学校の内容は、そのほとんどが発想が『農業全書』から構成されている。詳しくは後述するが、単なる自分の経験則のみならず、先人たちの足跡を辿りながらその内容を広げ深めながら子どもたちと共に農業体験を行う発想を得たものと思われる。しかし、実行段階においては、菅井小学校校長雄長忠の後押しによるところが大きいことが分かる。雄長がこの随筆を読んで感銘を受け実現を夢見ていたこと、初任地が菅井小学校ということもあって教え子がすでに親の世代になっていて協力が得やすいことの諸条件が整ったことにより農業小学校実現

にこぎつけることができたといえる。

初年度は、一期と二期に分け、一期はジャガイモ、二期はダイコンを育てることにしたが、農業小学校であるため、毎回校長である今西が講話を行うことにした。その原稿が、実践記録ともいえる『土ってあったかいねー農業小学校の記ー』に収録されている。ブラジル人の姉妹が一時帰国して菅井小学校に転校してきたことを知り、彼女たちを見ながらジャガイモが南米起源の植物であることを語り、ダイコンの種を撒いた際にはダイコンが日本人の食卓に上がってきた経緯や練馬大根の由来などを語っている。子どもたちに作物の栽培とそのエピソードを織り交ぜることで作物に寄せる思いが一層深くなるよう、実に計算されて語られていることが分かる。

前章の作家たちの実践と、今西の実践との決定的相違は、作家たちが現在という共時性を基調とした実践を行ったことに対し、今西は主体をあくまでも子どもたちとすることで昔からの伝統を後世に伝えようとする通時性を基調とした実践を行ったことにあるといえよう。子どもへの願い・思想を明確に持ちながら、未来を見据えての教育を行おうとしていたことが分かる。

IV. 実践の基礎となるものーテキスト、歌ー

今西が、農業小学校を構想するために参考にしたテキストがある。江戸初期の農学者宮崎安貞が著した『農業全書』である。今西は幼少期、印刷業を廃業した父親とともに奈良県生駒山麓に移住して農業生活を営んでいる。父親がその時何度も読み、赤線や書込みが施していたのがこの作品である。

「その夜、私は本棚から古い一冊の本をさがして読みはじめた。『それ農人耕作の事、其理り至りて深し。種を生ずる物は天なり。是を養うものは地なり。人は中にあてて天の気により土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ。もし其勤なくば天地の生養を遂ぐべからず……』元禄九年、宮崎安貞の著『農業全書』である。赤線や書込みがいっぱいある、父のかたみである。」(p.37)¹⁷

宮崎の『農業全書』は以下のような構成となっている。

卷之一 農事總論 卷之二 五穀之類

卷之三 菜之類 卷之四 菜之類

卷之五 山野菜之類 卷之六 三草之類

卷之七 四木之類 卷之八 菓木之類

卷之九 諸木之類 卷之十 生類養法 菜種類

卷之十一 附録¹⁸

この内容と構成は、今西自身が手掛けた農業小学校のテキスト『農業小学校の博物誌』の前半の内容に受け継がれている。

『農業小学校の博物誌』

イネと雑草 イネはどれだ 食べられる野草 雑草
と野草と作物 大ネコジャラシ イモを植える
ジャガイモの実 サツマイモの花 マメのひみつ
ナスの色 ハクサイだって生きている
ナノハナの虫 いいテントウ悪いテントウ 7月23
日の虫 ハクビシン ケモノ道 タヌキをめぐる輪
林のタネまき ひそやかな住人 冬虫夏草 オニノ
ヤガラ 農業小学校の演習林¹⁹

具体例を挙げると、農業小学校では水稻ではなく陸稲を栽培している。陸稲は『農業全書』にも登場していて、今西は水田ではなく畑作でイネを栽培する方法を選択していることが分かる。

イネと雑草

ぼくたちが毎日のように食べている作物がある。イネだ。イネの種がお米。お米を食べるためには、イネを植えて育てなくてはならない。農業小学校でもイネをつくっている。でもここは山。田んぼをつくるにはぐあいが悪い。農業小学校では、畑でイネをつくっている。畑でつくるイネをオカボ、とよぶ。オカボ畑を見てみると、イネじゃないものもまじって畑にはえている。雑草だ。だれも雑草の種なんか畑にまいていない。でも、雑草は勝手にはえてくる。なぜだろう。

日本で本格的にイネがつくられるようになったのは、弥生時代から。大陸からイネづくりが伝わったのだ。こういう雑草は、その時代のオカボ畑にもはえていたはずだ。畑の雑草はひきぬいてすてられる。昔の人も畑にはえた雑草をひきぬいていたはずだ。数千年ものあいだ、人間にひきぬかれても、また雑草は畑に勝手にはえてくる。なぜだろう。²⁰

卷之二 五穀之類 畠稻 又は旱稻共云ふ、又ゐなかにては野稻とも云ふ 第二

畠稻の種も色々あり。土地所の考へして利分のま

されるを作るべし。粳あり、糯あり、其中に古城稻と云ふは糯にて、米白くその粒甚だふとく、穂の長さ一尺餘もありて、其から大きに高くして蘆のごとし。是畠稻の名物なり。土地にあひたる所にてはおほく作りて、過分の利潤を見るべし。凡早稻を作る地は水田にしては水乏しく、又畠にしては濕氣ありて、兩様ともに宜しからざる地に是をうゆれば、水稻にも勝れて實りある物なり。肥へたる地は尤よし、大かたの土地にても濕氣ありて、少深く和かなる地に宜し。(p.95) ²¹

水田耕作が困難な山間部の土地では、少なくとも江戸期から陸稻を育てる習慣があったことが分かる。菅井農業小学校でも、その伝統を継承して陸稻を栽培している。後半の内容については、先述した西岡常一の教訓「お堂の木を買うには、木を買わずに山を買え」という言葉がある。

「お堂の木を買うには、木を買わずに山を買え。そういうことですわ。つまり一つの山に生えてある木でもって、一つの堂をつくるという、基本的な考え方でしょうな。吉野の木やら、木曾の木やらをまぜると強い弱いができて。」(p.266) ²²

今西は、この代々宮大工に伝わる教訓から、山の中で繰り広げられる動植物の営みを子どもたちに学んでもらいたいと考え、山本有三記念「路傍の石」賞の賞金で演習林となる雑木山を購入する。山の中で共生する動植物の営みを紹介したのが、テキスト『農業小学校の博物誌』後半の内容である。

V. 環境文学から観た農業小学校の理念

次に、自然や風景の表現から、イデオロギーや自然観を歴史的にたどる目的で研究されている環境文学の視点からこの農業小学校を観るため、『農業小学校のうた』について分析を試みる。先述した通り、今西は農業小学校を単なる耕作体験活動ではなく、場所を雑木林にまで拡大することによって、子どもたちが里山体験の中から自然環境について伝統的な日本文化について学習する環境を整えた。そして、彼が綴った農業小学校に関するエッセイや詩は、今日の、そしてこれからの自然環境について言及している箇所が見受けられる。

『農業小学校のうた』（絵本）

- 1 ぼくらの 学校は 尾崎原の／山の畑が 教室だ
青い 空には 雲ながれ／ときどきカケスが とんでいく
まども ガラスも ないけれど／いすも つくえも ないけれど／見える ところが みな教室
石砂、峰山、大室山／姫次、黍稈、伏馬田城／風巻頭の 山が 光ってる
ろうかは あぜ道 青い草／ナルコユリなど さきみだれ／セミガラなんぞが ついている
ツバメに トンボ、テントウムシ／ミミズも ぼくらの ともだちだ
たがやせ たがやせ／たがやせ たがやせ／ぼくらの 農業小学校
- 2 カラスも カケスも キジバトも／入学 したっていいんだが
豆をほじくりゃ 落第だ／ぼくらは 権兵衛じゃないんだから
それでも ぼくらは 考える／もしも／カラスも カケスも キジバトも
一羽も この世に いなかったら／クリも アケビも ドングリも
山には 一つも ないんだな／からしも カケスも キジバトも
たねまけ たねまけ／たねまけ たねまけ／ぼくらの 農業小学校
- 3 スギナ、ジシバリ、スベリヒユ／カヤツリグサにネコジャラシ
たいくつ したとき あそぶのに／ちよっぴり かわいい 草だけど
畑に はえたら じゃまものだ／スギナは ツクシを 出すけれど
スギナの はえる 畑には／おいしい やさいはそだたない
草ひけ 草ひけ／草ひけ 草ひけ／ぼくらの 農業小学校
- 4 村の おじいさんが いっていた／「ウリ作るより土作れ」
おいしい ウリを 食べたけりゃ／おいしい 土を作るんだ
夏には 青草 かりこんで／冬には 落葉を かきあつめ
ケイフンなんぞも まげながら／タイヒを いっぱ

い 作るんだ
そいつを 畑に すきこむと／おいしい 土が で
きるんだ
おいしいものを いっぱい 食べて／ぼくらが 大
きく なるように
やさいも ほかほか そだつんだ
すきこめ すきこめ／すきこめ すきこめ／ぼくら
の農業小学校

5 ケムシ、アオムシ、アブラムシ／畑は 虫の 天国だ
ヨトウムシなんぞという 虫は／にくらたしいた
ら ありゃしない
ぼくらが ねるとき おきだして／やさいの 葉っ
ぱを 食いつくし
朝には ねもとの 土の中／まあるくなって か
くれてる
かくれたって わかるんだ／フンが いっぱい お
ちている
ゆびさきなんぞで ほじくると／ころりと出てきて
しらんかお
にくたらしいったら ありゃしない
けれども けっして ぼくたちは／農業なんぞは
つかうまい
農業は おそろしい 毒ガスだ／毒ガス つかうの
は 戦争だ
ぼくらは 虫と こんくらべ
虫とれ 虫とれ／虫とれ 虫とれ／ぼくらの農業小
学校

6 一ど 見たいと 思うんだ／夜中に ぼくらの 学
校を
山の けものが やってきて／運動会など／やって
いるかも しれないんだ
ノネズミ、ノウサギ、ハクビシン／キツネや タヌ
キも くるらしい
ネズミは イモや ラッカセイ／ウサギも ラッカ
セイが 大すきだ
ハクビシンは トウモロコシが こうぶつだ
キツネは そいつらを おいかける／おいかけるの
は いいけれど
畑を ふみつけ あらすのだ／タヌキは 何を す
るのやら
モグラの 穴でも のぞくのか
畑の まわりに あみ はって／かかしなんぞを
おったてて

大きな 目だまも ぶらさげる／いろいろ くふう
を するのだが
動物たちも りこう者／いつも ぼくらと ちえく
らべ
ちえ出せ ちえ出せ／ちえ出せ ちえ出せ／ぼくら
の農業小学校

7 夏の おわりの ことだった／畑の 学校に いっ
て おどろいた
サツマイモ畑が むちゃくちゃに／ひっかきまわし
て あったんだ
大きな ひづめの 足あとで／すぐ イノシシと
わかったが
ひどい ひどい／なんぼなんでもあんまりだ
まだ ゆびほどしかない イモを／みんな くいち
ぎって しまうなんて
秋に なって／おイモが 大きく なったなら
すこしは あげても いいんだが／なんぼ なん
も あんまりだ
ところが その夜 ぼくたちは／ゆかいな おかし
な 夢をみた
トコトコ トコトコ／大きな 母さんイノシシが
ウリボウ つれて やってきて／ぼくらの 農業小
学校に
入れてくださいと いうんだよ
「カケスが おしえてくれました／畑の学校が でき
たよと
町の子なんかも やってきて／たのしく やさいを
作ってるって
トコトコ トコトコ／あの 大室山から きたのです
黍稗山も こえました／道志の川を わたってからも
ずいぶん さがして きたのです
やっと みつけて のぞいたら／いっしょうけんめ
い わいわいと
子どもも おとなも いっしょになって／おイモを
作ってるのが 見えました
あれが 畑の学校だ／町の 子どもが きてるなら
山の 子どもも／入れて もらえるに ちがいない
それで つれて きたのです／ちょっと たくさん
いますけど
みんな わたしの 子どもです
夢の 中でも イノシシは／畑を すこしも あら
してなんか いなかった
かわいい 小さな ウリボウが／いっしょうけんめい

ぼくらの まねをして／おイモ畑を たがやしていた
朝、目をさまして 思ったんだ／いいな いいな
あんな 学校に なったらいいな／山の けものの
子どもたちと
みんなと いっしょに たがやして／おいしいもの
が みのったら
みんなと いっしょに 食べるんだ
たがやせ たがやせ／たがやせ たがやせ／ぼくら
の農業小学校²³（下線は論者）

一番の歌詞からは、農業小学校は正規の小学校ではないが、正規の小学校では学び得ない大切なことを学ぶことができるという内容になっている。その大切なことの一つが「共生」という概念である。昆虫や小動物など、触ることさえできない子どもたちにはそれらが敵のように思われることであろう。しかし、農業小学校ではそれらが当たり前のように存在する。これから美味しい作物を作るためには、まず土を耕すことである。その願いが最終行に述べられている。

二番の歌詞からは、種まきの時期に訪れる鳥たちの存在を共生の概念から捉えている。種を啄む鳥たちの存在は、人間にとってみればありがたい存在ではない。しかし、鳥たちのおかげで植物の種子が撒かれ、その種子がやがて木となり、林となり、森になる。そして、森からの恩恵を受けることができるといった一連の流れが表現されている。

三番の歌詞からは、作物にとって雑草は天敵であることが示唆されている。子どもの遊びには利用できる雑草は子どもにとって嬉しい植物かもしれないという視点を持ちながらも、それが作物の収穫を阻害する要因になることを表現している。単に、雑草の草取りを指示することよりも、子どもの気持ちに寄り添いながら、理由を説明して納得して行動してもらえよう、今西の校長らしい姿勢が見受けられる。

四番の歌詞からは、農業にとって土づくりが基本であることを瓜の具体例を示しながら述べている。青草、落葉、鶏糞などの有機肥料が豊かな土を作り、その土によって豊かな実りがもたらされる。普段見過ごしてしまうような草や葉、敬遠しがちな排泄物が豊かな土には欠かせないとなれば、そのためには土を作らなければという子ども

の意欲を引き出す表現が施されている。

五番の歌詞からは、作物の天敵となる害虫と呼ばれる虫の存在を農薬を使わずに除去することの大切さが表現されている。農薬という圧倒的な威力に頼れば、虫を悉く除去することが容易になる。しかし、農薬は虫のみならず土や作物までも汚染することにつながる。その危険性を「毒ガス」と表現している。また、毒ガスを使用した戦争、化学兵器による戦地の影響にも話が及んでいる。平和児童文学を綴ってきた今西がぜひ盛り込みたい内容であったのではないかと推察される。

（レイチェル・）カーソンは問いかけます。毒性の強い殺虫剤の大量散布について「何のための大破壊？」なのか。「静かに水をたたえる池に石を投げこんだときのように輪を描いてひろがってゆく毒の波——石を投げこんだ者はだれか。死の連鎖をひき起した者はだれなのか。……たとえ不毛の世界になっても、虫のいない世界こそいばんいいと、……きめる権利がだれにあるのか」と。そして「恐ろしい武器を手にして、その鉾先を昆虫に向けていたがそれは、ほかならぬ私たち人間の住む地球、そのものにむけられていた」のです。（p.126）²⁴

六番の歌詞からは、害獣とよばれる動物たちの存在について、運動会を行っている光景に重ねることで動物の側に立って考えてみることを提案している。つまり、今西は動物を殺すのではなく、駆逐することを提案しているのである。そのためには、動物にはまさる人間としての知恵が試される。この知恵を使うことこそ人間の営為であることを説いている。

七番の歌詞からは、これまでの考え方を総合して、大人は理想的な生活を送るために日々努力しているということを子どもに伝えようとしている。大人が崇高な理想を持たず、ただ現実に対応するだけの生活を送ろうとすれば、子どもたちとともに未来を語れる存在にはなれない。差別や偏見のない、平和で共生が可能な社会を目指して、日々努力を重ねてほしいという強いメッセージが読み取れる。

VI. 今西実践の影響、展開

今西実践は、これまでには学校内外の自然体験の一環でしかなかった農業体験を小学校という新

たな形で、子どもたちの未来を見据えた思想の継承に一役を担ったといえることができる。そして、この実践は現在全国各地で実践されている農業小学校の先駆けとしても評価されている。さらに、現在ではそれぞれの農業学校がその取り組みの実態や教育的効果を検証する研究なども行なわれている。

農業小学校とは、1987年春、神奈川県北端の藤井町にある菅井農業小学校で全校児童7名から始まったのが最初である。小学校といっても文部省が定めた既存の学校とは違い、月に1回程度親子そろって農村を訪れ、通年で農作業体験や自然体験をするというものであるが、農業・農村の教育的機能を享受するシステムとしては注目すべき取り組みである。(p.283)²⁵

農業小学校は、1987年に神奈川県藤野町で児童文学者の今西祐行氏が初めて開校し、これが新聞などに上げられ1990年代に広まった。現在では農業小学校という名前の取り組みは全国に約30校あり、その内容は様々である。(p.188)²⁶

そのいずれもが家庭内交流や農業就業志向などの諸側面において教育的効果のある実践であることが証明されつつある。だが、これらの研究はいずれもが農学分野での研究であるため、これらが教育分野との複合研究がなされれば、さらなる効果が期待されるのではないかと考えられる。小学校低学年の科目である「生活科」では、「自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然のすばらしさに気付く、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。」「身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気付く、意欲と自信を持って生活することができるようにする。」「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができるようにする。」などの目標がある。菅井農業小学校では、ジャガイモ作りをした後、子どもたちがオペレッタを演じることでジャガイモの学習を完結させるという実践を行なっている。このオペレッタこそまさしく、「生活科」の目標にかなったも

のであるといえる。

また、『『おおきなかぶ』ごっこ』というエッセイでは、農業小学校である男の子がダイコンなかなか引けずにいた。誰かが二人で引くことを提案するが、葉っぱだけがちぎれてダイコンそのものは土に残っている。三人がかりでダイコンを引くと、ダイコンは途中から折れてしまい、三人ともしりもちをついてしまった。すると、傍にいた女の子がその光景を見て、『『大きなかぶ』みたい』と言う。子どもたちは小学校一年生の国語教科書に採用されている『大きなかぶ』が、授業の中ではあくまでもお話として読んでいたに違いない。この光景を見て、今西は「作家は、より本当のことを知ってもらいたいために、この世のことを、より真実に語ろうと思うから奇想天外な話になり、ファンタジックな話にもなるのだ」と述べて、思わぬ文学教育ができたことに喜んでいる。まさしく、農業小学校の中で「自然のすばらしさに気付く」体験が行なわれていることが分かる。

「総合的学習の時間」では、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと」「自ら課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること」などを目標に掲げている。今西は、エッセイで次のように述べている。

百姓はいろんなことをからだで覚えなければならない。農作業は食料を作るだけのものではなく、人間を作るものでもある。百姓をするということは、数学、物理、化学、国語、社会、体育、道徳、すべての学習をからだで考え、からだで覚えることなのだとは私に思っている。(p.121)²⁷

農作業は、あらゆる科目を身体感覚を通して思考し、定着させるものであるとして、その学習方法こそまさしく総合学習であるとの認識を示している。総合的学習の時間の「内容の取扱い」には、「自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生活活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること」とあるが、農業小学校の実践は、総合的学習の時間における環境教育に接続できる活動であると考えられる。

おわりに

今西の農業小学校実践は、子どもたちとともに文化としての農業、または農業から派生した文化を体験的に学ぶことを目的として構想された教育事業であった。農業小学校において体験を通して得られた学びは、国語科のみならず総合学習にもわたる広範囲かつ重層的な学びが可能であることが分かった。また、今回のテキストにした一連の今西実践に関する作品は、これ以降際立った作品を発表していないことから、今西のこれまでの創作活動の集大成といえることができる。また、全作品を環境文学、キリスト教文学の視点から考察することで、農業小学校に至るまでの思想形成の過程を辿ることもできよう。後者については、今後の研究課題とする。

〈注〉

- ¹ 最初に混同を避けるために詳説する必要がある。菅井小学校は学校教育法による小学校であるが、菅井農業小学校は学校教育法による小学校ではない。学習農園よりも規模が大きく、週末や休業などを利用して行う農業体験学校のことである。
- ² 3作をテキストに採用した理由は、それぞれエッセイ、図鑑、絵本とバラエティに富みかつ今西実践の理念や内容が端的に把握できることによる。
- ³ 関口安義（2004）『一つの花 評伝今西祐行』教育出版
- ⁴ 三井喜美子編（1998）『今西祐行研究 今西祐行全集別巻』偕成社
- ⁵ 今西祐行（1981）『くらがり峠』偕成社
- ⁶ 今西祐行文・西村燎子写真（1994）『土ってあったかいねー 農業小学校の記ー』岩崎書店
- ⁷ 今西祐行作・遠藤てるよ画（1982）『ヒロシマの歌』フォア文庫 岩崎書店
- ⁸ 三井喜美子編（1998）『今西祐行研究 今西祐行全集別巻』偕成社
- ⁹ 同上
- ¹⁰ 大津山国夫（2008）『武者小路実篤、新しき村の誕生』武蔵野書房
- ¹¹ 有島武郎（1981）『有島武郎全集第九巻』筑摩書房
- ¹² 同上
- ¹³ 尾西康充（2009）「有島武郎とE・S・ダニエルの農場ーニューハンプシャー州グリーンランドでの労働体験ー」

- ¹⁴ 今西祐行文・西村燎子写真（1994）『土ってあったかいねー 農業小学校の記ー』岩崎書店
- ¹⁵ 三井喜美子編（1998）『今西祐行研究 今西祐行全集別巻』偕成社
- ¹⁶ 徳富蘆花（1966）『徳富蘆花集 明治文学全集42』筑摩書房
- ¹⁷ 今西祐行文・西村燎子写真（1994）『土ってあったかいねー 農業小学校の記ー』岩崎書店
- ¹⁸ 宮崎安貞編録・土屋喬雄校訂（1936）『農業全書』岩波文庫
- ¹⁹ 盛口満・今西祐行（1993）『農業小学校の博物誌』木魂社
- ²⁰ 同上
- ²¹ 宮崎安貞編録・土屋喬雄校訂（1936）『農業全書』岩波文庫
- ²² 今西祐行（1991）「〈随想〉宮大工と土の文化」『大学と学生』
- ²³ 今西祐行作・長野ヒデ子絵（1991）『農業小学校のうた』木魂社
- ²⁴ 多田満（2015）『レイチェル・カーソンはこう考えた』ちくまプリマー新書
- ²⁵ 森島知子（2001）「農業・農村の教育的効果に関する研究ー舞鶴市西方寺平農業小学校を事例にしてー」
- ²⁶ 山田伊澄（2005）「農業小学校の取り組み実態と卒業文集からみた教育的効果の分析」
- ²⁷ 今西祐行文・西村燎子写真（1994）『土ってあったかいねー 農業小学校の記ー』岩崎書店

〈引用・参考文献〉

- 有島武郎（1981）『有島武郎全集第九巻』筑摩書房
- 池田春子（2005）「農業小学校の今西先生」（追悼・今西祐行）『日本児童文学』51(4)p.116-117
- 今西祐行（1981）『くらがり峠』偕成社
- 今西祐行作・遠藤てるよ画（1982）『ヒロシマの歌』フォア文庫 岩崎書店
- 今西祐行（1989）『生きること 耕すこと』家の光協会
- 今西祐行（1991）「〈随想〉宮大工と土の文化」『大学と学生』(310) p.47-49
- 今西祐行作・長野ヒデ子絵（1991）『農業小学校のうた』木魂社
- 今西祐行文・西村燎子写真（1994）『土ってあったかいねー 農業小学校の記ー』岩崎書店
- 大津山国夫（2008）『武者小路実篤、新しき村の誕生』武

蔵野書房

- 尾西康充 (2009) 「有島武郎とE・S・ダニエルの農場
ーニューハンプシャー州グリーンランドでの労働体験
ー」『国文学攷』(204) p.15-28 広島大学国語国文学会
- 坂本淳二 (2011) 「田舎体験型ツーリズムにみる『共働』
活動の可能性 ー福岡県旧黒木町おおにし農業小学校
の取り組みからー」『日本建築学会大会学術講演梗概
集』E-2 p.473-476
- 関口安義 (1996) 「今西祐行 三つの原点をめぐって (特
集児童文学この100年) (児童文学作家論) 『国文学解釈
と鑑賞』61 (4) p.73-75
- 関口安義 (2004) 『一つの花 評伝今西祐行』教育出版
- 徳富蘆花 (1966) 『徳富蘆花集 明治文学全集42』筑摩書
房
- 西岡常一・青山茂 (1977) 『斑鳩の匠・宮大工三代』徳間
書店
- 三井喜美子編 (1998) 『今西祐行研究 今西祐行全集別
巻』偕成社
- 武者小路實篤 (1991) 『武者小路實篤全集』小学館
- 森島知子 (2001) 「農業・農村の教育的効果に関する研究
ー舞鶴市西方寺平農業小学校を事例にしてー」『農林業
問題研究』36 (4) p.283-286
- 盛口満・今西祐行 (1993) 『農業小学校の博物誌』木魂社
- 宮崎安貞編録・土屋喬雄校訂 (1936) 『農業全書』岩波文
庫
- 多田満 (2015) 『レイチェル・カーソンはこう考えた』ち
くまプリマー新書
- 山田伊澄 (2005) 「農業小学校の取り組み実態と卒業文集
からみた教育的効果の分析」『農林業問題研究』41 (1)
p.185-188
- 米田利昭 (1994) 「宮沢賢治の手紙 ー教師をやめて本当
の百姓に、羅須地人協会の頃ー」『駒沢女子短期大学研
究紀要』(1) p.59-77